

「呼びかける」という行為についての小考：日本語とロシア語の例から

東出, 朋
九州大学大学院地球社会統合科学府地球社会統合科学専攻

<https://doi.org/10.15017/1854986>

出版情報：地球社会統合科学研究. 7, pp.89-96, 2017-09-25. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：

「呼びかける」という行為についての小考

—日本語とロシア語の例から—

ヒガシ デ トモ
東 出 朋

1 はじめに

見知らぬ人に対する適切な呼びかけ語がない、という議論をたびたび耳にする。たとえば日向(1983)は新聞の投書を例に挙げた。「場所は暗い夜道。呼びかけた人は、おまわりさんで、呼びかけられた人は会社勤めの女性。おまわりさんが彼女に伝えたかったことは、『ショルダーバッグをひったくられないように、反対側の肩にかけなさい』という注意であった。読者であるあなたなら、相手にどう呼びかけたであろうか。このおまわりさんは、『カノジョー、カノジョー』と呼びかけたのである。呼びかけた人の身分、立場、伝えたかった内容を考えるとこの呼びかけのことは、どうもちぐはぐである。この投書でも『もう少しマシな呼び方』はないものか、ということの問題にしたいのだが、では、どう呼べばよかったのか(27)。長谷川(1991)は、電車の中で小学生の男児が切符を落とした際、(著者も含めた)乗客らは誰も呼びとめる言葉が出てこず、結局婦人が立ち上がってその子のところまで行って手渡したという実体験を悩ましく記す。

日本語には、見知らぬ人に対する中立な呼びかけ語—「すみません」などではない、聞き手そのものを指す呼びかけ語—がない。他方、現代ロシア語には見知らぬ人に対する汎用性の高い呼びかけ語がある。女性に対しては“Девушка”(女性)、男性に対しては“Молодой человек”(若い人)と呼ぶことができる。それにもかかわらず、ロシア語にも「見知らぬ人に対する呼びかけ語がない」という議論が時折見られるのである。Ефремов(2009)は現代ロシア語の呼びかけ語のエチケットを分析した中で、次のように述べた。“К сожалению, современный речевой этикет, в отличие от достаточно жестоко структурированного дореволюционного, не имеет полноценного и удобного для любой ситуации оклика незнакомого человека.”(残念ながら現代の口頭エチケットは、革命前の十分厳密に構造化されていたのとは異なり、見知らぬ人に対してあらゆる状況で用いることができる便

利で完璧な呼びかけ語がない)(54)。例えば革命前は、身分や職業に応じて、女性に対する呼びかけ語として“сударня”、“госпожа”、“мадам”、“барыня”など様々な形式があり便利であったと言う。

見知らぬ人に対して何か行為を起こさなければならぬ時、二種類の問題があると思われる。まずはそもそも適切な呼びかけ語の有無の問題、次に、ある場合にはその選択が問題となる。それ次第で、呼びかけた後の行為の如何が変わってくるからだ。上述のおまわりさんの例は、呼びかけたものの、用いた語が不適切であったために、注意を促すことはできずに怪しまれてしまった。

「見知らぬ人に対してなんと呼びかけたらいいかわからない」という議論が続く背景には何があるのだろうか。本稿は、「呼びかける」という発話行為そのものについて考察する。そして、呼びかけ語自体、つまりその行為が本質的に備えている話し手と聞き手の相互交渉について検討したのち、日本語の呼びかけ語は基本的に感情表出を嫌うことについて論述する。なお本稿は、すでに先行研究で指摘された事実を元として、筆者の観察や体験を交えた上で、呼びかけという発話行為の再考を促すことをその目的とする。

2 「呼びかける」という行為自体の問題

呼びかけ語は人間関係を反映しており、それ次第でコミュニケーションの成功もかわることから、ポライトネス理論の研究対象である。ポライトネス理論とは、円滑な人間関係を築き、維持するために行われる言語行動を研究する分野であり、Brown & Levinson(1987)(以後B&L)は包括的な理論的枠組みを示している。B&Lの理論の枠組みの道具立ては「フェイス(face)」である。フェイスとは、会話参加者の欲求、すなわち、自らの行為を妨げられたくないという欲求(ネガティブ・フェイス)と、何らかの点で認められたいという欲求(ポジティブ・フェイス)を指す。そして、聞き手のフェイスを脅かさないように配慮しながらコミュニケーションを進めていこうとする言語行為をポライトネスと呼んでいる。

相手のフェイスを脅かすような行為 (Face Threatening Acts、以後FTA) を行う必要が生じた場合 (例えば依頼や非難、褒めといった発話行為)、話し手は極力相手のフェイスを脅かさないように配慮するはずだと考えられる。例えば「依頼」という発話行為は、邪魔されたくないという相手のネガティブ・フェイスを脅かす可能性を持っているため、話し手は聞き手のネガティブ・フェイスに配慮した「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」を取らなければならない。具体的には、依頼を切り出す前に相手の持ち物をほめたり、自分の依頼を小さいものに見せたりすることである。

では「人に (何かの目的をもって) 呼びかける」という行為はどのような性質を備えているのであろうか。B&Lによると、誰しもがネガティブ・フェイスとポジティブ・フェイスを持ち合わせており、フェイスを侵害しないように適切な措置を取る。「呼びかける」「呼ぶ」という行為自体が、話し手と聞き手の間の接点が「無い」状態から「ある」状態への変化であり、緊張を伴う状態変化である。見知らぬ人であればなおさらである。したがって、「行為」としてはネガティブ・ポライトネスに該当すると考えられる。ただそれと同時に、呼びかけ語の語彙的選択によって、その緊張感を緩和し、逆に相手の「よく見られたい」というポジティブ・フェイスを満足させるような行為にもなりうる。例えば、道を歩いているときに八百屋さんが (明らかに「お姉さん」ではないような相手に対して)「おねえさん」と呼ぶのは、(慣習でもあり、また)相手を満足させるためにそう言うのである。呼びかけの「行為」としての側面と「具体的な個々の発話」は別に考えなければならないだろう。

相手の呼び方、例えば名前を知らない場合、その二人の関係は不安定であると言える。その時、この二人はどのような態度を取るだろうか。具体例を提示したい。以下は筆者が留学していた際に実際に起きた、ルームメイトとの一件である。同室の一人がドイツ人 (以後N) であった。筆者とNはロシア語で話している。当方はNの名前を知っているが、相手は私の名前を知らない。最初に自己紹介したが覚えられなかったようで、今更 (一か月以上経って) 再度名前を尋ねることも憚られるようだ。Nは、日本語の「ねえ」や英語の“Hey”、“Listen”などにあたる、相手の注意を喚起し会話をスタートするための言語手段、例えばロシア語の“Слушай”をまだ知らない。であるから、Nは用事があっても一向に筆者と会話をスタートすることができなかった。例えば、筆者からは「ねえN、窓を閉めてもいい？」と尋ねることができ、暑がりのNはいつまでたっても「窓を開けてもいい？」と尋ねることができなかった。結局Nはいつも、

筆者が部屋にいない時に窓を開けていた。名前も話の切り出し方も知らないNは、私との交流を放棄し、もう一人のルームメイト (ちなみにNはこの人の名前は知っていた) と仲良くしていた。

この状況で感じたのは、「相手を呼べる」というのは立場が上である、ということである。こちらは話をいつでもスタートできるが、相手は話しかけられるのを待つばかりである。Nからすれば、発話の意志があるにもかかわらず、礼を失しないように気を遣うばかりに意志を実行できない。ただ、マナーについて考える余裕がない場合、発話を何がなんでも実行しなければならない場合は呼びかけ語の有無は関係ない。切迫状況でないにもかかわらず意志を実行できないという状況は、話し手 (この場合N) にとっては不本意である。また、話しかけられるのを待つしかないという受け身のポジションが、二人の会話における片方 (この場合は筆者) の優位性を決定してしまう。話し手は主体的に何らかの呼びかけ語を設定・選択しなければならないということがわかる。呼びかけ語を選択できない場合、呼びかけるだけでなくコミュニケーションそのものが困難になるのは、上に見た通りである。

話し手の主体的な呼びかけ語の設定は、それが発せられた段階で、必ず聞き手によってその適切性が判断される。その呼びかけ語が適当かどうかは聞き手の反応で分かるだろう。顕著な例として、見知らぬ女性に「おばさん」と呼びかけた場合、呼びかけられた相手は憤慨し、その呼びかけ語を認めないかもしれない。話し手は「呼びかけ」という発話行為を遂行したものの、聞き手はその呼び名を認めなかったといえる。これはたとえば、ある住人が近所に住む野良ネコを太郎と名付けたのに対して、別の住人がその呼び名を否認することは異なる。名付けの適切性という点では同様であるが、そこには名付け手と名付けられた対象の相互の交渉は存在しない。ある名付け手と別の名付け手が、AがいいかBがいいかの適切性を議論するのみである。しかし、名付けの対象がヒトである場合、そこには名付け手 (呼び手) と名付けられた対象 (呼ばれた対象) の相互の交渉が発生する。つまり、呼びかけ語の選択には、常に、話し手による選択と聞き手による判定という相互交渉がある。呼びかけ語 (対称詞) を選択するという話し手の主体的な行為と、その主体的な行為に対する呼びかけられた対象からの判定が問題になるのである。

この問題は汎言語的であると推測されるが、日本語では大いに問題であるだろう。なぜなら日本語は、話し手が聞き手本人を主体的に、意図的に評価することをひどく嫌うからである。以下では、呼びかけ語が備える話し

手の選択と聞き手による判定という二面性について論じる。

3 呼びかけ語が持つ指示性と評価性

では、まず話し手による主体的な呼びかけ行為に限定して議論を進める。

対象を「呼ぶ」ということはその人を聞き手として同定することであり、直示的に聞き手を「指示」している。そして同時に、「いかに呼ぶか」という話し手の聞き手についての「評価」も表示される。話し手がひとたび「呼んで」しまえば、必ずそこには「指示」と「評価」が表示されてしまう。呼びかけ語の「指示」と「評価」について論じたのは、川口(2015)である。

川口はフランス語の呼びかけ語を主体間モダリティの観点から論じた。「呼びかけ表現には基本的に指示機能が優先するものと評価機能が優先するもの」(373)があるといい、その例として“Salaud!”(Bastard!)を挙げる。この語は明らかに評価表現であるが指示機能がないわけではない。呼びかけの指示機能と評価機能は異なる二つの機能ではなく、混淆としたものであり、指示機能の勝る呼びかけ表現(固有名詞でさえ)でも社会的価値づけが付きまとい、評価機能が入り込んでいるという。そもそも呼びかけには「全体としては指示的価値が明らかな、固有名詞(Noémie)、職業(soldat(soldier)(兵隊)、階級(maitre(master)(先生))などがあり(中略)他方指示的価値ではなく評価的価値が勝る表現も良く用いられる。Ami(friend)(友達)は無冠詞でも、定冠詞(l'ami)(*the friend)や指示形容詞(mon ami)(my friend)を伴っても呼びかけとして用いられるが、語彙的にはプラスの価値評価を志向する。これに形容詞を加えてmon cher ami(my dear friend)(我が親愛なる友)、mon adorable amie(my adorable friend)(私の大切な友)のように評価を高めることもできるし、mon détestable ami(my abominable friend)(憎むべき友)のように低めることも可能である」(371)。つまり、呼びかけ語には指示的価値/評価的価値という共存可能な要素があり、評価的価値に関してはプラス/マイナスの価値評価を持つと言えよう。この考え方を本稿に適用すると、どのような語も、一度発せられた(主体的に選択された)際には、聞き手を指示すると同時に話し手による聞き手の評価を表明してしまうと言える。

ではここで、日本語の呼びかけ語の評価性について検討してみよう。日本語の呼びかけ語において評価性が顕著に表れるのは人称詞¹だろう。対称人称詞(e.g. あなた、おまえ)は呼びかけ語としてのみならず、文内での

指示用法として、つまり格として文内に取り込まれる。以下、対称人称詞が持つとされる評価性に関しての先行研究を概観する。

辞書や日本語の教科書では、「君」はやや気取った相手に対しての距離をおいた言い方であり、「お前」はやや乱暴な言い方で親しい相手に用いられるなどと、おおよそ似たように説明される。

下谷(2012)は会話分析の手法で二人称代名詞「あなた」について分析した中で、「あなた」は「話し手は判断・評価を下せる優位な立場にある」という「認識的態度(epistemic stance)」を相手に明示する場合に効果的に使用されると言う。

(1) 山際議員:[あなたがやんなかったら意味ないじゃん。=

山内氏:=あ、そうですね。(72)

(1)では、山内氏よりも年齢は若い政治家歴が長い山際議員の「あなた」に、自分が評価・判断をできる立場にあるという認識的態度が明示化されている。このように、「あなた」には「客観性」や「中立性」といった認識的な要素が含まれているので、聞き手との間に心理的距離をもたらし、相手を突き放す効果を持ち、話者の感情が表出されることになる。また「おまえ」は話者の強い感情を全面的に露呈するとも述べた。

大高(1999)は対称詞の選択基準を分析した中で、人称代名詞の機能として、直示的な指示機能のほかに「話者の心的態度(敬意や親愛感、軽蔑など)を表現するという付加機能」(31)を指摘した。敬意から軽蔑まで、話者の実に多様な心的態度が表現可能であるという。金井(2003)は二人称指示詞「そちら」を二人称名詞「あなた」と対照した中で、「『きみ』『おまえ』『あんた』などが『あなた』よりもあたりが強いのは、文体レベルの差異に起因する」(54、傍点ママ)と記述する。家族内呼称を分析した横谷・長谷川(2010)は、人称代名詞は使用される文脈に応じてその意味が変わると言う。「『あなたは私をいらいらさせる』と『あなたは私を安心させてくれる』の場合、前者のあなたが否定的な意味を示すのに対し、後者のそれは肯定的な意味を示す。言い換えれば、人称代名詞の聞き手への意味はそれが使用される文脈によって変化している」(276)。

田窪(1997)は日本語の人称詞について指示と照応という観点から分析し、命名の直示性と関連付けて論じた。人称名詞(e.g. 私、あなた)はそもそも名詞自体に話し手/聞き手という役割が与えられており、値(指示対象)は発話によって与えられる。これらの語を用いる場

合、話し手は聞き手との関係を人称名詞の選択（おれ—おまえ、わたし—あなた等）によって決定しなければならない。つまり、選択の決定権を話し手が持っている。また人称名詞には、聞き手という役割を話し手が発話によって直接聞き手に与える、という直示性がある。この二点が、親しくない人や目上には使えないという性質と結びついていると考える。それに対し固有名詞や定記述（e.g. 田中さん、お父さん、課長）は、その語によって値（指示対象）が割り当てられているだけで、話し手／聞き手という役割は発話現場で付け加わる。またこれらの語は既に指示対象が決まっている語であり、命名は話し手自身の選択ではなく、既に社会的に決まった（と話し手が考える）語を採用しているだけで、直示性を忌避できるため、親しくない人や目上の人にも使える、と述べる。

以上の先行研究はいずれも、それぞれの対称人称詞自体が持っている評価性について様々な説明を試みていると言える。対称人称詞は確かに聞き手を指示するのだが、聞き手を単に同定するだけでは終わらない。この語自体が持っているなんらかのコンテキストから逃れることは出来ず、むしろそのコンテキストが前景化してしまい、語の対象指示性を消すことはないものの評価性が濃く残る形式である。それに対し固有名詞や定記述は、語それ自体もコンテキストは持ってはいるが、先に何らかの値（e.g. 田中さん、お父さん）があるため対称人称詞ほど評価性が前景化されず、相対的に指示性が強くなる。

以上の先行研究を踏まえた上で、日本語の呼びかけ語の二種類—対称名詞と対称人称詞—の意味を指示的価値と評価的価値という観点で見ると、対称名詞は指示的価値が勝っており、対称人称詞は評価的価値が勝る語と考えられる(2)。

- (2) 対称名詞（e.g. 田中さん、ひろ子、お父さん、先生、運転手さん）は指示的価値優位である。それに対し対称人称詞（e.g. あんた、おまえ、あなた、きみ）は評価的価値優位である。

4 話し手と聞き手の相互交渉

4.1 話し手の主体的な行為としての呼びかけ語

日本語の呼びかけ語には、話し手による聞き手に関する評価が明示されることを嫌う傾向が見られる。まず対称人称詞に関して、基本的に自然談話での用法には強い制約がある。小林（1997）は自然談話における対称詞の使用、特に対称人称詞の少なさ（全データの0.23%）を

指摘している。田窪（1997）は、二人称の対称人称詞は使用に制限があり、基本的に同輩同士、あるいは、上位者から下位者にしか使えないと述べた。また前節での対称名詞と対称人称詞の指示性／評価性の議論から、(2)で示す通り、対称人称詞は評価性が相対的に高い。他方、外的要因（場面、話題）によって規定される呼びかけ語、またその個人に対して社会的にすでに付与された呼びかけ語は、自分の判断による評価ではなく、安心して用いることができる。つまり、対称人称詞は話し手自身が選択しなければならないから発しにくく、対称名詞は一般に決まった言い方であるから発しやすいと言えるだろう。

では、「名前の知らない相手に呼びかける」際にはどのような表現が選択されるだろうか。知らない人に呼びかけるというのは根本的に相手のネガティブ・フェイスを強烈に侵害する行為でもあるため、話し手は無意識のうちに聞き手のネガティブ・フェイスを侵害しないように適切な語を探す。例えば職業名「お巡りさん」「運転手さん」などの、その人に一時的に付与された性質や、疑似的な親族名詞「おじさん」「お嬢ちゃん」などである。また、そのような語が見つからない場合には、「その帽子をかぶった方」など、外見を描写した一時的な呼びかけ語を作ることができる。これらの語彙も、話し手が主体的、意図的に選択したというよりは、ある種客観的な、社会によって認められた記述である。

命名が話し手自身の選択ではないこと、つまり既に社会的に決まった（と話し手が考える）語を採用することは、対称詞の語彙的選択の余地のなさ、話し手の創造性の低さとも言換えることができる。具体的には、日本語には愛称語や罵倒する語など感情を意味的に強く含んでいる語が少ないことを反映しているのではないか。また、発話の瞬間に発話内容や相手に対する感情ごとに対称詞を変えることが不可能であることも含意するのではないだろうか。この点については5節で論じたい。

4.2 聞き手による判定

話し手の呼びかけ語の選択に対して、聞き手によって適切に判定されない、または不適切だと判定され、問題が生じる場合がある。第一に、コミュニケーション上の問題が挙げられよう。例えば、あまりに斬新な呼び名を用いた場合、それが誰を指示しているのか聞き手に理解されずにコミュニケーションに齟齬が生じる。筆者は学生時代「がっしー」と呼ばれていたが、その名を初めて聞いた人が筆者を呼ぼうとして「がし、それ取って」と言った。呼ばれた張本人はそれが自分を指示していると感じなかった。第二に、感情的な問題も挙げられる。

例えば、妙齢の女性が若い男性に「おばさん」と呼ばれて気分を害し、無視することがあるだろう。また、外国語で愛称語や罵倒語を用いられその意味を理解しても、母語でそれ相当の語を言われる場合ほどにその効果はない。それは、語の意味は理解できても、その語が備える感情や意味を身体的に共有できないからであると考えられる。

さらには、文法的とでも言える問題も潜んでいる。呼びかけ語のある語群は、仮に話し手が呼びかけ語のつもりで発しても、文法的にそれが呼びかけ語と解釈されないことがある。例えば、「お父さん」と意味的に類似した語「父」は普通、対称詞として用いることができない。

- (3) a. お父さん、お父さんの自転車貸して。
 b. 父、父の自転車貸して。 (作例)

(3b) を言われた場合、確かに聞き手(発話者の父)は反応できるかもしれないが、文法的な問題を抱えている。本来「父」は、呼びかけであることを示す間投助詞「よ」がなければ呼びかけと解釈されない。しかし「よ」を含む文(4)(5)¹¹は異なる文体を帯びる。

- (4) ら「アジョレ」と呼ばれる挽歌が歌われる。「わが隣人がブッシュで獣に食われている、父よ、死はこのようにやってきたのだ、母よ、死はこのようにやってきたのだ…」「…穀物倉
- (5) らをお赦してください。自分が何をしているのかわからないのです)(ルカ二三・三四)、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます)(二三・四六)。また、第二の特徴は「イエス・キリ

このように、話し手は主体的に呼びかけ語を選択できないことはないが、評価性が高い対称人称詞を極力避け、より指示性が高い、社会一般で認められた形式のほうが選択されやすいと考えられる。また基本的には、話し手と聞き手ともに、社会で認められた(と考えられる)形式を選択する(される)ことを前提としているが、聞き手に不適切と判定された場合にはコミュニケーション上の問題が発生する可能性があるだろう。

5 呼びかけ語を用いた感情表出の可能性

前節で述べた通り、見知らぬ相手に対する呼びかけ語としては、職業名「お巡りさん」「運転手さん」など、その人に一時的に付与された性質や、一時的に見なした疑

似的な親族名詞「おじさん」「お嬢ちゃん」などが選択される。そのような語が見つからない場合には、「その帽子をかぶった方」など、外見を描写した一時的な呼びかけ語を作ることができる。このような「一時的な呼びかけ語」は、あくまで一時的であり、外見や職業など、その人の(比較的)客観的な、共有可能で描写可能な外観や社会的役割を意味しているのみである。これらは相対的に指示性が強く、ただ呼びかけることに用いられ、感情表出¹²のために用いられることは少ないだろう。それは、日本語の呼びかけ語は固定された役割関係の確認の要素が強く、感情という極めて瞬間的、流動的な心的側面を表出する要素が低いためではないだろうか。

日本語に現れる人間関係の固定性について論じたのは、呼びかけ語の先駆的な研究を行った鈴木(1973: 129-206)である。鈴木は日本語と英語の自称詞と対称詞を分析し、それらの語彙の中に人間関係における役割が映し出されていると述べた。日本人にとって先輩対後輩、同僚同士、親子夫婦などの人間関係は「相互の役割が固定的であり、時と場合によって、異なる役割に変更するのが難しい」(193)。例えば、夫婦にとって「夫」と「妻」という役割はある種獲得的な関係であり、一種の緊張にも似た不安定さを含んでいる。他方、ひとたび子供が生まれると彼らは「父」と「母」というある意味で与えられた役割を得、これは前者よりも安定度の高い関係である。こうして得た「父」「母」という役割は、会社や教室といった別の場面では「同僚」、「教師」と「生徒」といった関係に変更できない。日本人にとって、父—母という関係における自己規定と、教師—生徒という関係における自己規定は衝突してしまう。つまり、AとBという特定の人同士の人間関係は本質的には二項的で固定的であるということだ。なおアメリカ人の場合は、人間関係が日本人よりはるかに多項的流動的な面が強く、AとBが夫と妻であり、学生と教師であり、ときには競争者であったりすることもありえるということである。

日本語の呼びかけ語の語彙では、日本人の人間関係における役割の固定的性質が表れており、固定的であればそれは当然話し手の主体的な選択の余地はほぼないと言える。日本語の呼びかけ語の語群には、そもそも話し手の主体的な選択ができる語彙がない。こうして、呼びかけ語は社会的な役割の確認の要素が前面化し、話し手の感情的な語彙選択は相対的に難しくなる。

それに対しロシア語では、話し手の感情を含んだ呼びかけ語が豊富に存在するため、語彙の選択は極めて重要である。(6)は、主人公と見知らぬ男性が話す映画¹⁴のワンシーンである。気分が乗らずパーティーから抜けたМаксим(マクシム)は公園のベンチに腰掛けたが、先

に座っていた見知らぬ男性に話しかけられた。

(6) Мужчина : Здорово. Закурить есть? О, спасибо, **мужик**. Ага. На. Жена, сука, домой не пускает. Слушай, ты чо?

Максим : Держи.

Мужчина : Спасибо, **братан**. Выпить хочешь?

Максим : Не.

Мужчина : Правильно, все зло от этой водки.

(男性 : やあ。たばこある? おおありがとう **man**。おお。はいよ。妻、メス犬、家に入れてくれない。ちょっと、これなに。

マクシム : いいよ持ってて。

男性 : ありがとう **brother**。飲む?

マクシム : いや。

男性 : その通り。すべての悪はこのウォッカから始まるんだ。)

マクシムは見ず知らずの男性に頼まれてまずタバコをあげ、その後、薄着で震えているので自分のジャケットを貸してあげた。この親切な行為に男性は感謝するが、当然名前を知らないの、普通名詞の呼びかけ語を付加して親近感を表した。二回の感謝表現で異なる呼びかけ語を用いることも普通である。この場面で重要なのは、呼びかけ語がなくとも決して構わない(コミュニケーション上問題が発生しない)にもかかわらず、さらには見知らぬ相手にもかかわらず、感謝の念を強調するためにわざわざ異なる二種類の呼びかけ語が付加されている点である。

第一に“**мужик**”と“**братан**”という二語が見知らぬ相手に用いることが可能な呼びかけ語であるという点、第二にこの二語は指示性より評価性が強い点、第三に呼びかける必然性はないのに意図的に付加している点、第四にこの二語が聞き手によって不適切という判定を受けていない点、いずれの点も日本語との大きな相違点である。ロシア語は、呼びかけ語による感情表出が日本語より可能であると言える。

ここでさらに視野を広げて考えたい。相手を呼ぶ行為は、単に話を切り出すため(いわゆる注意喚起)だけではなく、他の発話行為の代替となりうる。(7)は映画「となりのトトロ」のワンシーンである。カンタは母の言いつけで、祖母が引っ越しの荷ほどきを手伝っている草刈家へおはぎを届けにきた。帰りがけ、サツキに向かって叫ぶ。

(7) カンタ : おまえんち、おっぱけやーしき!

おばあちゃん : かんた〜!

おばあちゃんのこの叫びは、カンタを自分の元へ来させるため、またこの後に何かを述べるために呼んだのでは決してない。呼びかけ語そのものが「こら! 馬鹿なこと言ってるんじゃない!」という非難、怒りを表している。パラ言語的要素によって適切な解釈が支えられることは当然である。しかし、呼びかけ語の一語だけで、感情が全一的に伝達されることも確かである。この例では呼びかけ語が怒りの発話の代替となっているが、怒り以外にも、愛情、批判、叱責など他の感情を表出するような例は、日本語において既知同士の人間関係でも非常に少なく、実例としても観察が難しい。

それに対してロシア語では、このような呼びかけ語一語文による発話行為が頻繁に行われる。さらに驚くべきことに、見知らぬ相手に対しても用いられるのである。以下は筆者が観察した実例である。劇場で、幕が上がり序曲が始まっているにもかかわらず、若い女性が小声でささやき合っている。周囲の観客は不愉快であったが彼ら自身が会話を止めるのを待った。しかし堪り兼ねた淑女は“**Девочки!!!**”(女の子!)と発した。これは明らかに「うるさいわよ!」という非難、または「お喋りを止めなさい」という命令を含んでいる。非難か命令かは重要ではなく、その発話の結果としてお喋りは止み、淑女は目的を達成した。地下鉄のホームでドアが開くのを律儀に並んで待っている人々がいた。しかし中年の男性が突然肩をいからせ、列に割り込み真っ先に乗り込んでいった。そこでとある女性は“**Мужчина!!!**”(男性!)と発した。この発話も同様の解釈が可能である。割り込んだ男性に対する非難である。この二つの例は、名前の知らない相手に対して工夫して発話を切り出し、呼びかけ表現で呼びかけたからこそ、その呼びかけ語が発話行為の代替を担った例である。

本節では、日本語の呼びかけ語が感情表出を嫌うさまを、日本人の人間関係の固定性(鈴木1973)をもとに、ロシア語の例を引きながら論じた。

6 まとめ

本稿は、日本語とロシア語の呼びかけ語を切り口として、「呼びかける」という発話行為について検討した。まず呼びかけるという行為は、人間関係に敏感である呼びかけ語を適切に選択しなければならず、話し手による主体的な行為である。同時に選択された呼びかけ語が適切かどうかについての判定が聞き手によって行われる。話し手と聞き手の相互交渉が行われる行為であるた

め、ある種の緊張感をはらんでいる。あらゆる呼びかけ語は聞き手を指示する機能と聞き手を評価する機能を併せ持っており、話し手は指示性と評価性を考慮しなければならない。相対的に評価性が強い対称人称詞は極力避けられ、主体的な評価が低く個人の感情の入る余地がない、一時的な性質や社会的に承認された形式が選択される。その要因について、日本語の呼びかけ語は固定された役割関係の確認の要素が強く(鈴木1973)、感情という極めて瞬間的、流動的な心的側面を表出する要素が低いためだと考えられる。他方、ロシア語の呼びかけ語は一語で怒りや非難など発話行為の代替を担い、感情を伝達することを嫌がらない。

呼びかけ語が持つ感情伝達を分析するためには、日本語の愛称語や罵倒語などの語彙が自然談話でいかに用いられているかを事例に基づいて考察する必要があるが、それは今後の課題とする。

ⁱ 「人称詞」について、先行研究では様々な用語が用いられているが、本稿が採用するのは「対称名詞」と「対称人称詞」である。なお、引用に際してはオリジナルの用語をそのまま用いている。

ⁱⁱ 少納言コーパスより。

ⁱⁱⁱ なお本稿では、一般に理解される「感情」について考え、「感情とは何か」という哲学的、本質的な議論に触れない。

^{iv} 映画"Питер FM" (2006) より。

参考文献

- 大高博美 (1999)「日本語における対称指示語彙選択のストラテジー」関西学院大学言語教育センター紀要委員会(編)『言語と文化』2. 29-41.
- 金井勇人 (2003)「二人称指示における指示詞「そちら」についての考察：二人称名詞「あなた」との対照を通して」『一橋大学留学生センター紀要』6. 53-62.
- 川口順二 (2015)「呼びかけとモダリティ」川口順二(編)『フランス語学の最前線3』359-401. ひつじ書房
- 小林美恵子 (1997)「自称・対称詞は中性化するか」現代日本語研究会(編)『女性のことば・職場編』113-137. ひつじ書房
- 下谷麻記 (2012)「自然談話における二人称代名詞「あなた」についての一考察：認識的優位性 (Epistemic Primacy) を踏まえて」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』22. 63-96.
- 鈴木孝夫 (1973)『ことばと文化』岩波新書
- 田窪行則 (1997)「日本語の人称表現」田窪行則(編)『視点と言語行動』13-44. くろしお出版.
- 長谷川禮子 (1991)「日本語における呼びかけ語の使われかた (4) —知らない人に対する呼びかけと親族名称の使用について—」『洗足論叢』20. 1-16.
- 日向茂男 (1983)「呼びかけ」水谷修(編)『話しことばの表現 講座日本語の表現 3』27-36. 筑摩書房
- 横谷謙次・長谷川啓三 (2010)「呼称が示す談話モダリティ—無規定な呼称とそれ以外の呼称との比較—」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』(59) 1. 275-292.
- Brown, P. & S. C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage* : Cambridge : Cambridge University Press., 田中典子(監訳)他(2011)『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』研究社
- Ефремов. В. А. Речевой этикет : обращения в современной речи. // *Русская речь*. – 2009. – № 6. 53-59.

Analysis of personal address as a speech act

Tomo HIGASHIDE

This paper focuses on personal address as a speech act, by using Japanese and Russian vocatives as an illustration. First of all, addressing someone, in particular an unknown person, is a speech act of an interactive negotiation between speaker and hearer; the speaker needs to choose an appropriate word and use it in an appropriate situation. This means that addressing is the speaker's subjective action. At the same time, the hearer always judges the appropriateness of the word chosen by the speaker. Secondly, every vocative has two coexisting functions: identification and evaluation. A speaker in an instant chooses one form for the vocative, assessing the balance between the two functions. Japanese second-person pronouns have relatively strong evaluative properties, that is why they are mostly avoided. On the other hand, it is easier to choose second-person references which invoke temporary characteristics of the hearer or are generally socially approved, because they include less personal evaluation toward the hearer. Finally, we discussed this preference regarding address, drawing from the analysis of Suzuki (1973), who says Japanese address forms always include the element of confirmation about fixed personal and social roles. Speaker's feelings or attitudes, very ephemeral and fluid, are difficult to express by Japanese address forms. In comparison to Japanese, Russian vocatives more frequently convey speaker's feeling, for example in a stand-alone vocative sentence. They can act as a substitute of another speech act (e.g. censure, scolding), showing explicitly the feeling or attitude toward the hearer, in contrast to Japanese address forms.